

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

-日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕	252

近江における弥生社会の理解にむけて

— その方法と課題 —

大崎 康文

1. はじめに

“近畿の水瓶”といわれる琵琶湖は県の中央に位置し、その面積は県全体の面積のおよそ1/6を占めている。琵琶湖から流れ出る河川は唯一瀬田川のみで、他の県内の河川はすべて琵琶湖に注いでいる。近江盆地を取り囲む山地から琵琶湖までは距離が短いわりに比高差があるため、河川は上流で激しい浸食作用を行い、中流域では扇状地を、下流では沖積平野や三角州を形成している。近江の弥生文化は、その発達した沖積平野を中心に華ひらいた。縄文時代までは自然環境との調和のもとに生活が営まれてきたが、弥生時代になると自然環境を人間の有利になるように改変する、環境破壊のはじまりでもあった。

近江において、どのような契機で弥生文化が導入され展開していったかを検証することは、当時の列島における弥生文化の伝播と各地域での展開過程を検証する手掛かりになるであろうし、また、次の古墳時代の始まりと近江の関わりを考えていく上で極めて示唆に富む成果が得られることとおもわれる。

2. 分析の目的

地域論を展開するにあたって、まず近江の弥生土器の編年を確立すべきであることはいうまでもない。考古学的に物事を考える場合、まず、遺跡(遺構)の時期的変遷を重要視し、そのために遺物(主に土器)の編年作業に時間を割くことが多い。しかし、土器はその地域独自のもののほかに他の地域の土器が「搬入品」として存在する。このため、各地域の土器論を十分に理解していなければ近江の弥生土器の編年は確立しないといえる。恥ずかしながら私自身はまだ確固たる編年観を持ち得ていない。しかし、弥生時代の遺跡(遺構)の立地・構造を詳細に分析することで判明できることも数多くあると考えられる。

そこで、分析する項目として、(1) 集落の構造と立地、(2) 水稻耕作の開始と展開、(3) 墓制、(4) 生産用具—石器と鉄器—、(5) 青銅器、(6) 土器、の6つを挙げた。自分の知りうる範囲の中で、現在の研究成果をもとにそれぞれの項目について分析の目的を述べてみたい。

(1) 集落の構造と立地

ふつう発掘調査では、ひとつの集落をまるごと調査するということがあまりあることではない。永年にわたって同一地域内の調査成果を蓄積することによって、ようやくほんやりと全体像がうかがわれるといったところである。こういった意味では、近江において弥生時代の集落の全貌が明らかになっているところは皆無であるといってもよい。

弥生時代の集落というと、環濠集落と高地性集落がまず思い浮かぶ。これらの形態を採る集落がすなわち政治的・軍事的な緊張状態をあらわしているかどうかはさておき、まずそれぞれの集落の構造を分析することが基本作業となる。ひとくちに集落といってもそれを構成する遺構は竪穴住居、掘立柱建物などの建築物、井戸、貯蔵穴、環濠などの構造物がある。それぞれの遺構の規模や組合わせが社会の展開に伴い変化していくことは指摘されている通りである。遺構単独については、例えば広い面積に複数の住居跡が見つかった場合、それぞれの形態を分析するとともに、同一時期のものは何棟存在したかも考え、集落の存続期間も検討しなければならない。建築物自体の構造を考える場合は、湖東南部から湖南地域にかけて見られる五角形住居や後期以降に出現してくる守山市伊勢遺跡周辺に見られるような大型の掘立柱建物については、集落内の立地状況を考えねばなるまい。また集落内には住居以外の施設として各種工房跡、高床倉庫や貯蔵穴が存在する。高床倉庫は湿気を嫌う種籾の保存手段として存在しているものであり、貯蔵穴は県内では確実な例は知らないが、他地域の例を見ると縄文時代同様ドングリなどの堅果類を非常用食料として備蓄する例がある。また、食糧保存用ではないが、木製品を作るための部材を保存するための土坑も存在している。これらの保存施設がひとつのあるいは複数の住居に対してどの程度の割合で存在するのかもあわせて検討することで、集落内の空間利用状況を把握したい。

(2) 水稲耕作の開始と展開

従来、弥生時代の始まりについては、水稲耕作に適した沖積地に水田を設け、近隣の微高地上に集落を営むと考えられていた。ただし、近江においては弥生時代前期の土器を出土するもの、いずれも明確な水田遺構を伴うものはごく限られる。

また、これまで弥生時代の遺物が見つかっていなかった甲良町内においても、尼子遺跡で、長原式深鉢の口縁部片と弥生前期の壺が同一土坑内から出土している。同遺跡は犬上川左岸扇状地にあり水稲耕作には不適當な地である。周辺では縄文時代後期には一大集落が営まれるが、その後この地が再び活況を呈するのは7世紀以降に行われたと考えられている開発を待たなければならなかった。ただしこの扇状地上には累々と旧河道が点在している。尼子遺跡の例は、旧河道が扇状地上にありながらも保水性が良く、水稲耕作が可能であったことを示唆しているのではないだろうか。

このような点をふまえると、遺跡の立地を分析し、検討することは、近江における弥生文化の採用と発展を考える上で非常に有効であると考えられる。各遺跡から検出した遺構や出土した遺物を分析することは、遺跡のもつ様相を検討する上で必要不可欠であることはいままでもない。

弥生時代の水田は、当初水田経営の可能な低湿地近辺に営まれ、その後、自然環境の変化による地形の変化、あるいは生産の拡大による可耕地の欠乏などにより湧水のある低丘陵の谷間や扇状地端部に移動し、さらには灌漑・排水能力を獲得した段階で湿地や微高地上に展開していくものと考えられている。したがって、水田そのものは検出例が乏しいため検討の対象にはなりにくい。集落遺跡の時期別立地を検討することは弥生文化の展開を考える上で非常に有益なことであると思われる。ただし、現在の地形は弥生時代以降現在にいたるまで、開発または自然環境の

変動に伴い大きく変化しているため、弥生時代の地形とでは相違が認められるのは至極当然のことである。そこで、大まかな地形の復原には地質図や土地利用図などを用いて、集落遺跡周辺の地形については1/500あるいは1/1,000の地図にマイクロコンターを描き込んで微地形を復原した¹¹²。

水稲耕作は、単に種籾がもたらされたのではなく、耕作用具とともにひとつの生活様式として導入された。縄文時代の打製石斧は土堀具としての機能が取り沙汰されているが、新たに導入されたいわゆる大陸系磨製石器(太型蛤刃石斧・抉入石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧)は耕作用具である農具を製作するための道具であり、水稲耕作には必要不可欠の道具である。また、木製農具は水田の開発、起耕から収穫後の再耕作まで必要不可欠な道具であり、体系的な水稲耕作を行うためには水稲耕作を導入した当初から必要な農具と農具製作の石器類は当然セットで採用されたものであろう。したがって、木製品がその性質上残りにくい¹¹⁴ことを割り引いて農具の一種類のみの出土であっても水稲耕作が行われていたものと積極的に判断したい。

(3) 墓制

弥生時代の墓の形態には、方形周溝墓、台状墓、土壙墓、墳丘墓などが挙げられる。方形周溝墓はおおむねまとまり墓域を形成することが多い。しかし、被葬者が生前に生活していた集落との関係となると不明な点が多い。木棺の形態から被葬者の出自を求める方法も考えられているが¹¹³木棺そのものが腐朽しやすく出土例が少ないため、検討の対象となる木棺の出土が必然的に広範囲に渡ってしまう。弥生時代のモノの流れはすなわち人の流れではあるが、モノが動くときは多くの人の手をわたって長距離を移動する。したがって、モノの動きの範囲が直接的な人の動きを示すことではないことは当然であり、広い地域はある程度限定できても集落を確定することまでは不可能である。他地域との比較という点では、周溝墓そのものの形態や群構成、土器供献の方法(器種構成の分析)を考えていくことは有効であろう。土器を供献する行為を墓上祭祀と考えるならば、野洲郡中主町湯ノ部遺跡¹¹⁶や草津市烏丸崎遺跡¹¹⁷からは木偶が出土していることから、木偶を使った祭祀も念頭に入れておきたい。¹¹⁸

また、これまでのところ近江では丘陵尾根上に築造される方形台状墓は発見されていない¹¹⁹。このことは弥生時代の墓域が集落遺跡と隣接するという前提に立って集落遺跡の立地と変遷を考える場合、技術の発達に応じた開発の範囲を考えるにあたって極めて示唆的である。

(4) 生産用具—石器と鉄器—

弥生時代は青銅器と鉄器の使用が始まった時代である。しかし、青銅器が銅鏃などの実用利器や銅鐸などの祭祀用具に用いられたように広く利用されているのに対して、鉄器がどのように利用されていたのかは依然不明な点が多い¹²⁰。木製農具の製作痕を観察する限り、明らかに鉄器により製作されたとされるものは古墳時代以降のもの¹²¹とされている。弥生時代では木器の製作には石器を用いたと考えられるので、日常生活に対する石器への依存度は依然高かったと考えられる。したがって、弥生時代は鉄器が石器を駆逐したのではなく、補完関係にあるもの¹²²と考える。

(5) 青銅器

青銅器は鉄器や一部の石器と同様、弥生時代になって使用され始めた。しかし、木製農具やそれらを作り出す磨製石器などは、水稻耕作の実際の作業技術の側面を持つものに対して、青銅器は直接水田を耕したり、木器を作ったりはしない。祭器的性格が考えられる青銅器としては、野洲町小篠原(大岩山)遺跡の銅鐸²³、虎姫町五村遺跡の巴型銅器・小型仿製鏡²³、長浜市鴨田遺跡の小型仿製鏡が知られている。これらはいずれも在地の生産物ではないと考えられている。青銅祭器を持つことができた遺跡の地域内での位置付けを行なわなければならない。

(6) 土器

北部九州を除いて、各々の地域における最初の弥生土器といえ、各地域から出土する遠賀川系土器であるといえる。この極めて個性的な壺や甕は、胎土やプロポーションに破片でもそれとわかる特徴をもっている²⁴。近江における最古の弥生土器は長浜市川崎遺跡、栗東町霊仙寺遺跡出土の壺で、唐古遺跡の編年であるところのⅠ様式中段階に相当するものとされている。弥生文化を採用した時点では、土器の器種構成は壺・蓋(貯蔵用)、甕(食料加工用)が基本で、鉢が少数出土するぐらいであるが、中期になると、木製高杯の形態をそのまま模倣した高杯が出現し、以後後期には出土土器全体の約2～3割を占めるようになる。また、中期から後期前葉の土器を出土した草津市宮前遺跡の甕は口径36cm、器高51.5cmを測る非常に大型のもので、外面には煤が付着していることから実際に煮炊きに使われていたことがわかる。また、口縁端部を3～4ヶ所上方につまみあげる、いわゆる波状口縁(山状口縁)²⁴をもつものであり、この時期には受け入れた弥生文化を独自の生活様式のもとに展開していったことがうかがわれる。さらに、後期の土器を出土する長浜市今川東遺跡からは各人の銘々器を思わせる小型で丸底の鉢が出土している²⁴。一般的に、中期から後期にかけて高杯や器台など新しい器種が出現する一方で、甕などは同じようなプロポーションで大きさの異なるものが出現し器種の構成が多様化する。

土器は日常雑器であればあるほど、その地域独自の生活様式を反映しているものと考えられる。出土土器の詳細な分析により在地産土器の認識ができれば、周辺地域の土器と比較したときに分布圏の確定ができ、交流範囲を知る手掛かりにもなるであろう。

3. 作業の内容

以上の分析内容について、具体的な作業の方法を述べると以下ようになる。

1：弥生時代遺跡地図の作成

県内遺跡地図をもとに作成する。遺跡の範囲は基本的には遺跡台帳に基づくが、最新の成果を盛り込むことはいうまでもない。地図に直接入力することによって遺跡の位置と立地を確認することが出来る。また、立地状況を詳細に検討し、地質図と対照させることで、土地開発技術の解明、時期別の集落の変遷を明らかに出来る可能性がある²⁴。

2：遺跡台帳(遺跡Sheet)の作成と遺構・遺物の比較検討

各遺跡ごとに検出された遺構、出土した遺物を遺跡台帳(遺跡Sheet)にまとめ、比較検討する。

この作業の中で土器でいえば在地産土器の認識が可能となろう。遺構・遺物ともに、各遺跡ごとに種類・構成を遺跡特有の文化様式としてまとめたい。

3：近江の地域色の明確化

河川や丘陵で区画される小地域内での遺跡間の比較のなかで、個々の遺跡のもつ個性や共通性を認識する。共通性はその地域の中での地域色として、個性はその遺跡の持つ特殊性として再認識できる。さらに大きな地域間の比較検討を通じて、小地域内で地域色が新たに近江の弥生文化の様式として設定出来るはずである。

4. おわりに

以上、弥生時代の集落遺跡のもつ弥生文化の様相を文化様式として総合的に捉えることについて、その設定理由と分析方法について述べてきた。最後に、もう一度その意義について触れておきたい。

弥生時代には小河川流域ほどの小地域が、集団の作業なしでは成り立ち得ない水稲耕作を通じて「ムラ」としてまとめ、⁽¹⁾「ムラ」がまとまって（あるいは統合されて）より大きな「ムラ（あるいはクニ）」となり、より強固な集団として独自の文化色（地域色）をみせるようになる。この地域色は大きな意味では、「近江」という「国」になってもなお引き継がれるものと考えられる。この地域色・地域性・独自性がいつ、どのように発生したかは、各遺跡がもつ弥生文化の様相を分析することで明らかにすることが出来るのではないだろうか。独自の文化様式を形成した地域は、さらには政治集団としての性格を帯びようになると考える。したがって、弥生時代後期から次の古墳時代は、古代国家形成の萌芽期にあたる⁽²⁾と考えたい。以上の理由から、近江の弥生時代の地域色の成立過程と発展を検討し、考えることは、古代国家形成史を検討する材料になるとのではないだろうか⁽³⁾と考えるのである。

今後の課題としては、実際に作業を進めるにあたってどこから手をつけるかということがある。近江という大きなフィールドを、時間で区分するのか、場所で区分するのかということであるが、まず大河川流域単位で小地域を設定して、その地域ごとに作業を進めていきたい。

また土器については、先にも述べた通り、周辺地域とくに東海地方の弥生土器の動向を十分に把握するしながら作業を進めるべきであろう。「自らの世界を創造しようとした」⁽⁴⁾弥生社会を考えていくためには、弥生文化の導入あるいは交流関係のあった周辺地域の動向を知り、常に念頭に置くことが必要であろう。

乱脈・乱暴な文章になってしまったことは、ひとえに筆者の勉強不足によるものである。お詫びするとともに、皆様のご批判を仰ぎたいとおもう。

註

(1) 弥生時代を扱う本稿において、律令制以来の旧国名である「近江」という名称を使用することは不適切であるかもしれない。しかし私のイメージでは、弥生時代に生まれた地域色が古墳時代以降、さらには「近江国」

が制定されてもお残るように思われるからである。

- (2) 桑原久男「弥生中期集落の発達」『みずほ』第16号 1995.7
- (3) 田路正幸「近江地方弥生時代の竪穴式住居形態」『滋賀考古学論叢』第4集 滋賀考古学論叢刊行会 1988
- (4) 『大型建物から考える邪馬台国の時代と近江』皇子山を守る会編 1994
『伊勢・大州遺跡現地説明会資料』守山市教育委員会 1995.1.14
佐伯英樹「⑥野尻遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査1994年度年報』栗東町教育委員会 (財)栗東町文化体育振興事業団
- (5) 北部九州地方や山口県西部玄海灘沿岸では、湿気を嫌う種籾を貯蔵できるように工夫された袋状貯蔵穴が弥生時代前期から中期前半にかけてつくられている。貯蔵穴内壁には粘土を貼ったり焼き固められたりして湿気の浸入を防いでおり、種籾以外にも各種食糧が備蓄されている。(参考文献：『弥生人の食卓—米食事始め—』大阪府立弥生文化博物館図録10 平成7年度春季特別展 1995)
- (6) 兵庫県玉津田中遺跡では、ミカン割の部材が貯蔵穴から見つかっている。また、長浜市塚町遺跡からは加工途中の木製品が保管された土坑(SX-02)が見つかっている(伊藤 潔「地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書」長浜市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 長浜市教育委員会 1995)。今回は、部材以外にも組み合わせの構造をとる木製農耕具も同様に貯蔵穴内で水付けの状態では保存されていた可能性を指摘しておきたい。すなわち組み合わせ部、とくに北部九州型のくさびを使用して組み合わせる形態を探るものは、乾燥すると部品自体が痩せて結合がゆるくなり、使用時に支障をきたす恐れがあるからである。若干話は飛躍するが、私が担当した発掘調査の作業員さん達は「手バチ」を夕方作業が終わるごとに水を張ったバケツに結合部を浸けて片付けていた。
- (7) 近江における弥生時代の始まりについては、丸山竜平氏が1980年代までの研究をまとめている(丸山竜平「近江における弥生文化の開始について —滋賀里V式の細分をめぐって—」『滋賀考古論叢 第1集』1981)。
- (8) 長浜市川崎遺跡や守山市山賀遺跡、草津市烏丸崎遺跡、新旭町針江浜遺跡などはこの例にあてはまる。
- (9) 松浦俊和「コメ作りと環濠集落」『近江の古代を掘る—土に刻まれた歴史—』開館5周年記念企画 大津市歴史博物館 1995
- (10) 内田保之『在土北・尼子遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXI-3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1993
- (11) 同町小川原所在の小川原遺跡は縄文時代後期の大集落で、平地式住居や多数の集石・配石遺構が検出され、西日本では初めてハート型土偶が出土している。当遺跡でも、縄文時代の遺構面の上層は奈良時代の掘立柱建物となり、時代の隔絶が見られる。(奈良俊哉・中村健二・畑中英二『小川原遺跡1』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XX-3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1993)
- (12) この検討に使用したい地図には「土地利用図」、「国土基本図(1/2500)」、「国土地理院地形図(1/25000)」のほかに、『農業水利及土地調査書』(滋賀県内務部編 大正3年)がある。『農業水利及土地調査書』を除き、いずれの地図もほ場整備以前に製図されたものを用いることはいままでのないが、空中写真から製図されたものが最良である。また、「地形図」は長浜平野ではほ場整備が行われるのは1985(昭和60)年以降であるため、比較的新しい地図でも有効である。『農業水利及土地調査書』では県下の水田の水の過不足を水系ごとに調査しており、どの水源からどの地区の水田に水を引いているのか、水系ごとの水利状況が記載されている。川からの引水が困難である場合は溜め池や湧水地から水を引くなど、大型重機による灌漑水路開削以前の自然地形に制約された当時の土地利用の状況をみることができる。また、国土地理院撮影空中写真からは、疑似赤外線反応により水田に埋没している溝や旧河川、湿地が判別できる。判別した旧流路には遺跡の立地から弥生時代の水利を考えるヒントが埋もれている可能性がある。
- (13) 太型蛤刃石斧については、従来からの磨製石斧と同様のものが多く、稲作技術とともに新たに採用されたのは縄文時代には形態が無かった石器のみであるという見解がある。(金関恕+大阪府弥生文化博物館 編『弥生文化の成立』1995)

- (14) 木製品が残りにくいことは、製品が腐朽することよりも、大きな製品はより小型の製品へと再加工され、常に形を変えていって最後は燃料となって燃えて灰となるためであることは言うまでもない。
- (15) 福永伸也「5. 木棺墓」『弥生文化の研究』8 祭りと墓と装い 1987
大崎康文「県内出土の弥生時代の木棺について」『針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)』一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ 滋賀県教育委員会委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1992
- (16) 浜 修「弥生時代の木偶と祭祀—中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—」『紀要6』(財)滋賀県文化財保護協会 1994
浜 修ほか「湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ」県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅱ) 滋賀県教育委員会委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1995
- (17) 「弥生時代の木偶が出土」『滋賀埋文ニュース』第136号 滋賀県埋蔵文化財センター 1992
そのほか蒲生郡安土町大中ノ湖南遺跡からも2体出土している。(『大中ノ湖南遺跡発掘調査概要』滋賀県教育委員会 1967)
- (18) 前掲(15)
春成秀爾「祭りと習俗—縄紋的伝統の衰退と農耕儀礼の成立」(金関恕+大阪府弥生文化博物館 編『弥生文化の成立』1995)
- (19) 伊香郡余呉町黒田長山墳墓群は丘陵の緩斜面上に築造されているが形態的にも築造技術的にも方形周溝墓である。(田中勝弘「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ—伊香郡余呉町所在黒田長山古墳群—」滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1981)
- (20) 青銅は融解点が鉄に比べて低く製作しやすいが軟質のため、実用利器としての使用は困難であるとされている。鉄器は北部九州地方を除き、鉄剣や鉄斧などが若干知られるだけで出土例自体が少ない。青銅器の石製鋳型を製作する際に鉄器を用いたのであるうか。
- (21) 又鋸の刃の部分など鋭角になる加工が施されるものは、鉄器で製作されたものとされている。
- (22) 『昭和58年度国庫補助による 出土青銅製遺物の実態調査報告』(財)元興寺文化財研究所 1984
- (23) 『平成3年度 滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1993
『弥生の祈り人—よみがえる農耕祭祀—』滋賀県立安土城考古博物館 1994
- (24) 三宅 弘「鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ」滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1994
鴨田遺跡ではこのほか五銖銭が出土している。朝鮮半島では全羅南道麗川郡三山面西島里からは五銖銭30枚以上が、また濱州道山地港からは五銖銭4枚・大泉五十2枚・貨泉11枚・貨布1枚と小型仿製銭が出土している。さらに、山口県宇部市沖ノ山遺跡(中期後半～後期初頭)からは五銖銭96枚・半両銭20枚が朝鮮無文土器内から見つかっているという。(西谷 正「弥生時代の青銅器—北部九州を中心として—」『季刊 考古学』第27号 1989.5) 弥生時代において列島各地で製作された青銅器の原材料が中国貨幣であったと考えるとき、一枚の五銖銭が鴨田遺跡の性格を示唆するさらに重要な資料となる。
- (25) 破片でもそれとわかるため、その土器ばかりが取り上げられることが多いように思われる。遺跡によっては遠賀川式土器のみを取り入れ、水田経営は採用しなかった場合ももちろんあると考えている。
- (26) 都出比呂志「畿内第Ⅴ様式における土器の変革」『考古学論考』(株)平凡社 1982
渡部昌宏「縄紋と弥生の食器セット」『弥生人の食卓—米食事始め—』大阪府立弥生文化博物館図録10 平成7年度春季特別展 1995
- (27) 当協会技師 神保忠宏氏に実見させていただいた。
- (28) 佐原真「琵琶湖地方」『弥生土器集成 近畿編』
- (29) 当協会技師 稲葉隆宣氏に実見させていただいた。
- (30) 大阪府弥生文化博物館では、大阪府城山遺跡(弥生時代後期)で発見された火災住居から当時の食事風景を復元し展示している。ここでは高杯が銘々器となっている。『弥生文化博物館展示図録』大阪府弥生文化博物館 1991

① 筆者自身は、前期には沖積平野の中の後背湿地など水利条件の整った場所にまず集落が形成され、その後は水脈をさかのぼって開発を進め、平野部縁辺の丘陵地の谷筋に谷水田を造成するようになる、と感覚的に捉えている。ただし前述したように、前期の土器を出土する遺跡については、現地形の立地上明らかに水稻耕作には不向きな場合がある。これらの遺跡の性格については、縄文文化の生活様式の中に弥生土器のみ採用したものなのか、あるいは大陸系磨製石器や水稻耕作農具を持ち、生活様式そのものが弥生文化であるのかを検討しなければならない。土器の胎土分析を行い、土器のプロポーシオンと分析結果をクロスチェックすることによって弥生文化の伝播経路を明らかにすることは可能であろう。

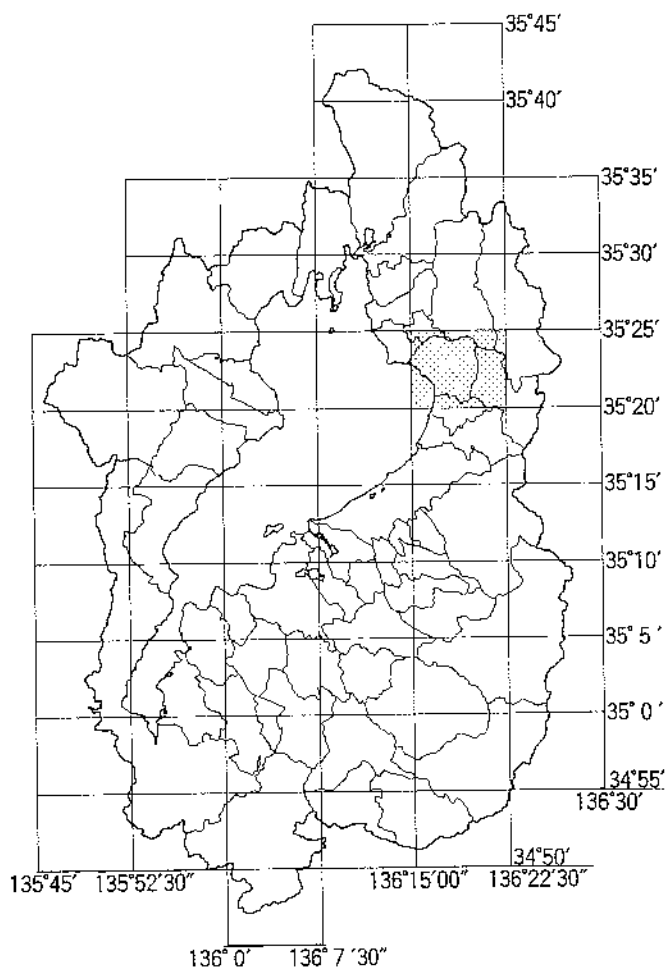
② 『縄文ノ弥生 変換期の考古学』第1回東海考古学フォーラム豊橋大会の記録 1995

参考：「簡易鳥瞰図」について

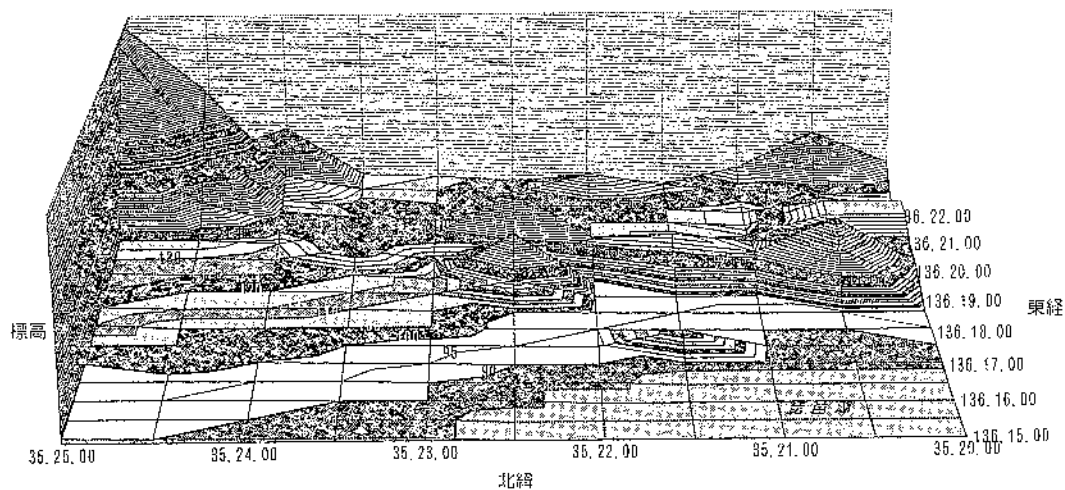
第1図は、『平成2年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会）の地図対照図に加筆したものである。この地図は国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複製したものであるので経度・緯度が記載されており、地図上に容易に経度／緯度方眼をひくことができる。第2図は緯度・経度ともに30秒ごとにラインを設け、その交点の標高をひろって表組みし、グラフ化することでできた「鳥瞰図」である。この鳥瞰図は画面上で上下左右360度自由に回転させることができるので、任意の地形をあらゆる方向から検討することが可能である。

なお、この鳥瞰図の作成にあたって、当協会技師神保忠宏氏には様々な助言をいただいた。

[作成システム：Microsoft Windows3.1(DOS/V)+Microsoft Excel Version5.0]



第1図 地図対照図



第2図 長浜平野簡易鳥瞰図

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668